

# 早稲田大学図書館蔵「仏鬼軍絵巻」翻刻と解題

大澤 菜 歩

## はじめに

早稲田大学図書館蔵「仏鬼軍絵巻」(以下、早大本)は江戸時代初期に制作されたとみられる二巻の白描模本である。本作は、極楽の仏菩薩と地獄の獄卒との争いを主題とする。

同主題の作例としては、京都・十念寺に所蔵される室町時代制作の絵巻一卷(以下、十念寺本)が広く知られており、江戸時代にはこれをもとにした版本も流布していた。十念寺本は前半部分が欠落しており、後続の諸本もこの構成を踏襲するため、物語の全容は長らく不明とされてきた。一方の早大本は、これらの諸本に欠ける絵と本文を備えた伝本であり、十念寺本とは別系統の作品とみなされるが、未だ十分な検討はなされていない。そこで本稿では、初めに早大本詞書の翻刻を掲げ、続いて早大本本文を諸本と対照し、本の位置付けを確認する<sup>1)</sup>。

## 一 概要

### 〔略書誌〕

全二巻、紙本白描模本(一部淡彩)

上巻、二七・七×一〇一八・八センチ

下巻、二七・七×一五・二五・一センチ

箱蓋表「此合戦状は仏智に／叶へり更に／そしる事／なかれ」と墨書  
表紙は絹本無地、外題及び内題なし

見返しは紙本金砂子散らし

本紙は楮紙、上巻全二八紙、下巻全四一紙

上巻は二段、下巻は四段構成(下巻第四段は詞書のみ)

上巻冒頭部に「此二幅十念寺之什物而一休作之土佐光信画之」と墨書

上下巻の奥書に「法泉禪窟什物」朱文方印「禾晉」

上下巻の巻頭、巻末の紙継部分に朱文方印「籍田長興」

上下巻の下部にわずかに虫損あり

詞書は漢字平仮名交じり

### 〔内容〕

『仏鬼軍』の本文は、『室町時代物語大成』や『お伽草子事典』に解説が収録されているが、これらは十念寺本系統の諸本に基づいており、物語前半部については触れられていない<sup>2)</sup>。ただし、十念寺本での欠落部を備える伝本として、後に挙げる京大文研本が現存している<sup>3)</sup>。早大本の本文は、この京大文研本の内容と一致する。以下では、早大本各段の梗概を記す。

### 上巻第一段

阿弥陀如来が極楽を地獄に移す先例を文殊菩薩に問う場面から始まる。文殊は諸宗の経典から先例を示し、これを聞いた阿弥陀は大日心王に事の仔細を伝える。大日はこれを受け、地獄を平定するために、西方からは阿弥陀の軍を、東方からは薬師如来の軍を、南方からは宝生如来を、北方からは釈迦

如来の軍勢を差し向け、さらに不足するところには金剛胎藏両界から諸尊を加勢に向かわせるべしと勅定を下す。

#### 上巻第二段

前段の極楽側の様子に対応して、炎魔王をはじめとした地獄側の様子が語られる。炎魔の発言により、今回の戦の発端は、獄卒らが勝手に、生前に功德を積んでいた衆生を地獄に落としたという極楽側の訴えによることが明らかになる。この訴えに対して、獄卒は近頃、一度南無阿弥陀仏と唱えれば、どんな罪業をも滅することができるとして、あえて罪を犯す者たちの多いことを嘆く。獄卒は続けて、自分達は業の秤にかけて罪業の重い者のみを地獄に落としているのであり、道理にかなっていないのはむしろ極楽側の訴えである。と炎魔に進言する。仏菩薩に負けじと戦の準備をする獄卒、牛頭・馬頭、十王らの様子が語られ、三途の川、地獄の責め苦の様相が描写される。

#### 下巻第一段

阿弥陀如来を大将として、戦の準備を整える二十五菩薩、地藏菩薩たちの様子が語られる。二十五菩薩らは紫雲や蓮台、獅子などに乗って進軍する。その他の軍勢は弘誓の舟に乗り、生死の大海へと出航する。大将の阿弥陀は豪華絢爛な武具を身に付け、軍勢は地藏を先陣として、極楽から地獄へと攻め入る。

#### 下巻第二段

東方から攻め寄せる日光・月光菩薩をはじめとした薬師如来の軍勢の様子が語られる。十二神将は、それぞれの刻に対応する十二支の動物の頭を兜につける。薬師如来は、今度の戦に勝つたならば、衆生の病をなくそうと十二の大願を起こす。

#### 下巻第三段

北方から寄せかける釈迦如来の軍勢と、南方からの宝生如来が地獄に向か

う様子から始まる。南方の宝生は他の軍とは異なり、取り立てて注目すべき眷属を率いず、自らの持物である如意宝珠を投げて戦う。阿弥陀・薬師の軍勢とともに、獄卒らと激しく戦うが、地獄の軍勢はますます勢いづくばかりで、七日間決着はつかない。

#### 下巻第四段

大日如来の遣わした加勢により、ようやく仏側が勝利をおさめ、地獄は浄土へ転じる。地獄の冥官はそのまま曼荼羅の聖衆として引き上げられ、地獄であった場所には八葉蓮華の都がたてられる。都の中心には大日心王を、東には薬師、南には宝生、西には阿弥陀、北には釈迦を据え、四隅には普賢・文殊・観音・弥勒が配される。結語では、悟りはそれぞれの胸の内にあり、結局は地獄も浄土に他ならないと説かれる。

## 二 翻刻

### 〔凡例〕

- 一、本文中の異体字については、通行の字体に改めた。
- 一、判読不能の文字は□で示した。
- 一、対校本として、十念寺本(十)及び京大文研本(京)を用い、各段末に異同を示した。用字の違いについては校異をとっていない。
- 一、なお、早大本下巻詞書には、底本における錯簡に基づくと思われる本文の乱れが確認される。現状で下巻第一段冒頭に記された内容は、本来、下巻第四段前半に位置づけられるが、現状ママの翻刻を掲げ、錯簡箇所を【】で示した。

上巻

巻頭墨書

此二幅十念寺之什物而一休作之土佐光信画之

第一段

むかし恋し床しとなげきかなしむ

し七世四恩たつねとりて極楽の友たより

に仕らんとそはやりける弥陀大將軍の

仰にいはいはく炎魔王を追おとして極楽を地

獄にうつさん事は先例ありやいなやはしめ

てひか事をたくみ出さんも自由の咎のかれ

かたし大聖文殊は三世諸仏には九代祖

師なり地獄と極楽と一所に立たる先蹤

ありやなしやと官の日記をひらきて考

申せとそ仰はくたる其時大聖尊よくく

一切経と申平文を開きて申ていはく

天台宗には阿鼻の依正はまたく極楽の自

心に処し毘盧の身土は犯下の一念をこらすと

説き花嚴宗には三界唯一心外無別法

心仏及衆生是三無差別と説き真言宗

には地獄天堂仏性闡提生死涅槃皆是自

身仏之名字といひ是こそ地獄と極楽と一

所なりと云証撰本文に候法相宗三論

宗にも一所先例のよし是本此上阿弥

陀重て仰ていはく炎魔王は重代の弓取

いまた背に土つけす大勢の武者也我は是三

身の中には報身五智の中には妙觀察智

仏の中には次の仏なり大日経の疏にいはいはく

指於西方觀無量壽仏是如来方便智と

いへり我宗にて法身如来大日心王と云

上願まします昔は地獄も極楽も皆大日心経

の敷地なりかやうの大事を申上すは其恐

あり御後見の金剛薩埵を請し奉り

て此子細を申入たまへり大日心経の仰に

いはく炎魔王宮并に八大地獄は我が屋鋪

の字の一門なり雖然阿防羅刹と云非常

のふて物本体をわすれて是を知行す但

極楽の若者共は往生人むかへんとて管

絃はかりは上手なり弓矢とりとは聞えす

中く蜂のすに手かくなどそしめしたまへる我

はからひに随ふへし極楽の勢はかりにては

叶へからす西方をは阿弥陀大將としてよす

へし東国には究竟の武者おほかる国なり

其を郎等にくして薬師仏大將として東

の手をよすへし南方をは宝生仏に仰

せ付て北方をは釈迦仏大將としてうけ

取たまふ若よわからん所をは真言宗の金剛

胎藏両界諸尊不動降三世を大將として

かたき在中に取龍て興ある戦一いくさ有

へしとそ勅定は下りける

1京「と」なし

2京（割注なし・一字分空白） 3京「ミノ」

第二段

炎魔王此よし内々聞受て申ていはく其こそ  
ゆゝしき僻事たくみたまふなれ先世七代のむ

かしより仏界と衆生とは境ことにして四至

傍尔顕然なり実も穢土をさし越て仏界を

たにも通領せは謀叛おこしたまわんもことわり

なり六道四生二十五有胎卵湿化生老病死

の郡々里々は皆我が知行の旧領也其中に

ことに地獄は又我が屋鋪なり修羅宮餓鬼城

は時くの山庄わた殿なり正理憲法の世の

中に今にはしめていかてかかやうの狼籍を

はたくまるへき牛頭馬頭と云下部の者共は

なきかかつく冥途と娑婆とのさかひに関すへ

て地藏供奉觀音坊などいふ修行者見へ

かゝらはしやそくひつきておひ出せかへりちう

せさすなとそ論言は下りけるかさねて阿防羅

刹をめしよせてたつねらるゝ事は抑十方に

浄土あり其中に西方極楽の殿原張本とし

て仏の国々冥顕仏陀の境界ことにめつらし文

をして天台華嚴真言秘教の中よりふる

反古とりよせて証文として冥途を打とるへき

と其支度ありと聞ゆ我は則自業自得果

の憲法をまつ此度とはなんたち僻事をして

或は真言をかきまもりにかへ或は陀羅尼の声

を聞或は一念なり共弥陀を念する輩も

あれ或はよみかきたる人にもあれ或は僧に物を

供養しあるひは仏に花一ふさも参らせたる

物をや地獄に落としたるそれは則訴の根源なり

わきまへ申せとそ仰は下る獄卒申ていはく

何をかくしきふらはんそ近來は一念弥陀仏の

輩の地獄にはおちれり其故は南閻浮提に

あしきへんに入て南無阿弥陀仏となふれば

いかなる罪業をかしたる者も罪にならずとて  
 わさと愚癡なる男女尼法師のこことく罪をつく  
 る法門正教を破し余の仏事善根を申留  
 むる事以外の罪業深重の事なり一期か間  
 におかせる罪業と功德と校量業のはかりに  
 かけて罪業おもき者は地獄におとし候あやしき  
 事は先年の頃極楽將軍の仰そとて呵法地  
 蔵申ていはく一紙半錢の功德をもつくらん  
 者をはたとひ十悪五逆の者なり共罪の軽重  
 をはとはす極楽へ参らせよと仰られしはひか事  
 なり我君とそ不敵けにこたへ申城郭の  
 支度より心もことはも及はれず小乗経等の  
 日記にまかせてこしらへたり炎魔大王の通  
 領したまへる中有冥途の勢をあかするに  
 諸仏菩薩の方おとりまさりもよもあらし  
 城をかまへたる体いかなる仏力も當時のことくは  
 おもひかけあらし娑婆と冥途とのさかひ  
 には門関樹と云大なる樹あり木の下に關す  
 系辻かためて牛頭馬頭といふ死生不知の者  
 共赤たうさき青たうさきして九万億恒  
 河沙の劍の元太鑄うちつきくならひ居て  
 一人か頭に六十四のつのおいたり六十四の  
 眼あり血眼をいからかせはいなつまのことし  
 目もあてられすおそろしおのくとし物  
 かたりしていはくむかしよりをれらは不覺  
 土ちかのはやはしりそかし釈迦仏もおそろ  
 しからぬに手なみはしらせたまひたるらん八  
 十にて入滅せさせ給しも我等か手にかゝるに  
 あらずや其外の仏菩薩は皆無常の使に責

られて死なせたまへるおもへは安平也我国は月  
 も日もなければきはめてくらし案内もし  
 らぬ仏菩薩のならわぬもの、具してよせ  
 よせかけたらは空に□悲とひきして劍の  
 山にをひかけて中に取龍て物の具はきとらん  
 とそさゝやき居たる扱むかふには大なる劍の山あ  
 り劍の葉の林おほくおいたり七日七夜にそ  
 わつかにのほれる劍のひしをうへたり骨髄を  
 くだき手足を切かたはらに鉄の床に鉄の湯  
 わかしてちらすきもむねをこからかし折節  
 を焼七重まで鉄の城をかたくかまへ七重まで鉄  
 の網高くはり縦広八万由旬也山のそはに三  
 泉と云大なる河なかれたり九泉と云小河九まで  
 流たり東岱には烟おほく北部には露しけし  
 わつかに此劍の山をうち破りて入たり共三途  
 川と云大河なかれたり水はやく劍をうへたり底  
 もみへす山水の瀬と云はやく瀬あり紅深の淵  
 と云ふかき淵ありつるきの口してわれもく  
 とはみくらはんとおもひ居たる毒虫大蛇か  
 すしらすむかひの岸には炎魔大王を大将  
 として十人の大王こそ方々をかためて待  
 かけたれ多百由緒那の銅燃猛火さしのけ  
 てもへたり八万由旬の阿鼻大城まことにかたく  
 はけし八寒八熱次第をまほて十悪五逆  
 叫喚の声かまひすしたかひにてう状の  
 こと我等もよもきこみし炎魔后炎魔妃  
 といふはたほこをさしあげたる死の札生の札  
 をそかいたてにはかきまはしける梢には淨頗  
 梨のかゝみをそ前に立たる木戸口には校量業

のはかりをしつらひたる泰山府君五道大  
 臣をはしめとして異類異形の冥官冥衆一  
 切衆生の左右のかたに善悪をしるし二人  
 の俱生神にいたる迄皆城の内にそ楯龍り  
 ける愚癡慳貪の弓箭を帯して破戒殺生  
 の鋒をさし上たり勢の多はかすかきりなし  
 九十九百九千九万九億恒河沙の勢を百千  
 度かすふとも猶残りの勢はおほし算数  
 辟喩も数へつくさし熱鉄丸をまろめて  
 ところにふらしけるおそろしくとそ  
 つまやりける

1京「切」 2京「ゝ」入る 3京「ニソ」  
 4京「タル」 5京「分テ」  
 6京「ゞ」 7京「カソウ」

## 下巻

### 第一段

【大日心王此由を聞召て密嚴国土より  
 大勢をそつかわしける金剛界と云里より  
 十三九会の七百余尊胎藏界と云都より  
 三部四重の五百余尊を打出たまへる虚空  
 より大聖大悲不動明王よせたりけり西  
 方より大威徳明王よせたまふ北方をは金剛  
 夜叉明王かためたまへりいとまをくれすおとらし  
 まけしと打とそ降伏しける罪業と功德と  
 とりあひ取組上に成下になり上下二伝同  
 時俱有と釈する此心也経云無明住地其力  
 最大仏菩提智之所能断といへり火界呪

に焼れて炎魔王宮もなか／＼烟とそみへ  
たりける其時冥官冥衆阿防羅刹も

心ほそくなりて同土軍をそはしめけるなん  
たちか仏法結縁の物に所もおかず地獄へおとし

たるゆへそかしひか事の末の末なしとそい  
さかひけるしかれともかなはず追捕して十方

浄土へそ引接しける阿防羅刹をはこしらへず  
かして心を改て仏になしたまへり冥官冥衆の

すかたをかへすして曼荼羅の聖衆に引上せて  
等流法身と地獄に浄土をうつして地に<sup>2</sup>字

をしきてかたちを八葉蓮華に作りたり中古  
には大日<sup>3</sup>心王の都を立たり東方をは葉師領

したまへり南方をは宝生領したまひ西方をは<sup>4</sup>  
阿弥陀申うけたまひ北方をは釈迦主つきたまひ

四角をは普賢文殊觀音弥勒知行したまへり  
是も則一往の会尺なり諸尊皆同大毘盧

遮那仏身と尺して大日心王の都なり  
しからは多由旬のほのをは仏の万徳と成

にけり劍の山とおもふは妙覺山なり鉄の  
湯とおもふは功德水なりけり是をは五智の

都とそなつけたる地獄と浄土とはたかわさり  
けり法相宗には於繩起地覺と積し繩を

蛇とおもふはおそろしかりつれ共繩とみなし  
つれはおそれなし地獄おそろしとおもふは

迷の前の事なり菩提なりけりと悟りぬれは  
くるしからず唯識論には愚夫顛倒迷之

真如故無始來受生死苦聖者離倒悟  
之真如便得涅槃畢竟安樂といへり或人  
師の釈に是を悟れるを覺者と云是にま

とふをは<sup>5</sup>凡夫と云頭密の宗義是には過  
へからず抑五智の都余所に聞たれは我等

か胸の間に八葉<sup>7</sup>の蓮花あり本覺の仏  
三十七尊座したまへり<sup>6</sup>【極樂】極樂

にすてに我も／＼と物の具そへして兵具  
くらへはしまりけり出立たまへる九品蓮台

の大名高家たれ／＼そ等覺山の觀音  
左衛門蓮花<sup>8</sup>の、勢至太郎横笛の葉王兵

衛笙笛の葉上武者懺悔の里の普賢  
殿琴<sup>9</sup>上手の自在五郎三賢寺の師子

孔十郎同き陀羅尼三郎能滿福智の<sup>10</sup>  
虚空藏冠者歡喜地の徳藏庄子同弟

法藏別当又金剛藏太夫光明太郎  
殊宝平内指箭の山海慧太刀の花嚴

王大箭月光王小箭の日照<sup>11</sup>はやり尾の  
定自在一番<sup>12</sup>かたる三昧王ひたやふりの大自

在王一人当千の白象王打物の大威徳  
はやはしりの無辺身かくのことくの二十五の

菩薩一人して九億万恒河沙の郎等を  
打供<sup>13</sup>して乗物はこのみ／＼也紫雲にはする人

もあり蓮台にむちうつ人もあり或は馬  
或は龍あるひは師子或は大象に乗者もあり

此外生死の大海に弘誓の船うかへて十万  
余艘<sup>14</sup>までそさし出たる舟一艘の大きさ

は<sup>15</sup>舳艫よりへに至るまで四十万里なり  
一日に九十日<sup>16</sup>をあゆむ程の道<sup>17</sup>、一日も

やすます八十年はかり行は舳より艫<sup>18</sup>には  
行つきぬへし日本国は東西二千八百  
七十里南北五百三十七里としるせば

舟一艘の勢を案するに日本国百千あつ  
めたり共およふへからずかかる舟に乗つ

はもの十万余艘そ出立たる是は極樂の  
東門より内の勢也極樂と娑婆との間に

大国十万里あり国ことに催して男頭  
につきて一人も留まらず皆出京たり雲の

ことく霞のことし<sup>19</sup>守に身もひへておひた、  
し大將軍の阿弥陀仏は青黄赤白

の錦のよろひ直垂に相好莊嚴の小手を  
さし大慈大悲の御よろひに三身即一

の金物うちて八万四千の白星の甲に  
四十八願さしたる胡籙<sup>20</sup>に僧祇劫へたる功德

の重藤のふる弓に妙觀察智の幡さして  
青蓮の眸を一度運せは光明遍照十方

世界とそか、やきける大將<sup>21</sup>を守て臆病  
なる郎等一人もなし次の十五日<sup>22</sup>をは吉

日に定めて地藏菩薩<sup>23</sup>するへして毎日晨  
朝入諸定の明ほのによせかけたる

1十「なかく」 2十「中台」 3京「心」なし  
4十「は」なし 5京「は」なし

6十「を」入る 7十「の」なし  
8京「台」 9京「の」入る

10十「に」入る 11十「王」入る  
12十「かくる」 13京「借」

14十「に」入る 15十「ともよりへに」  
16十「里」

17十「を」 京（割注なし・一字分空白）  
18十「出立」 19十「聞」 20十「青」

21十「かかる」入る 22十・京「は」なし  
23十「そ」入る

## 第二段

東方をは薬師如来うけたまひてよせさせ  
たまへり八日は吉日なり是は又ことの外  
大勢なり西方極楽には宗徒の人々

二十五騎是は薬師に同座して酒器  
へたてて評定する程の仏七供肥迄  
そ座したまへる日光菩薩月光菩  
薩をはしめとして前後に圍遶せる

十二神将等の一の郎等八万四千騎  
なり医王善逝の仰にいはいはく日記を  
ひかへす計ことなくして合戦をはしむ  
れば勝事百に一もなししかあれは

薬師経の日記にまかせ真言儀軌  
を守りてよすへきなり仰にいはいはく  
十二神将は元来重代の武者なり  
夜昼物具はつさず用心きひしく

さふらわるゝ殿原は誰ゝそ宮毘羅  
大将 伐拆羅大将 迷企羅大将  
安底羅大将 頰你羅大将 珊

底羅大将 因達羅大将 波夷羅  
大将 摩虎羅大将 真達羅大将

招杜羅大将 毘羯羅大将

時をつくりて辰時の大将は龍の頭を甲に  
きるへし巳の時の大将は巳の頭を甲に  
きて次第ゝに時を守てよすへし其  
外の仏菩薩は物の具すへからず或は蓮

花を持或は宝珠をもち或は印を結  
或は合掌して日比の所持の物かわるへ  
からず其故は我力にて仏智業といふ

業を身にぬりつれば鎧甲をきね共射  
れ共矢たゝすきれ共剣いたからずことに  
我等か余の仏に勝て光をたてほこと

頼なり薬師瑠璃光如来とはさて  
名付られたりたとひ阿防羅刹鉄  
を七重までかまへたり共我ゆきむかわん  
には瑠璃光と云光を以て矢いたくさ

し通さんに鉄の城は物ならし罪業  
の衆生を一人も余の仏のかたへは  
ちらさずして我浄土へせめとらんとて  
仰は下る儀軌本経に付て五色の幡

をさしたまへり高は四十九尺大円鏡  
智の楯もたせて部類眷属は八日  
の夜四十九燈を手ゝにともして  
今度の合戦に勝たらは国ゝの衆

生にはやまふあらせし命永からせん  
とそ十二の大願をはおこさせたまひ  
ける

1十「へたてす」 2京「ガ」入る  
3十「は」なし

## 第三段

北の手よりは一代教主釈迦牟尼  
無上大薄伽梵大将してよせさせ  
たまへる是は又ことに意趣ふかき事也

其故は今此三界皆是我有其中衆生  
悉是吾子而今此処多諸患難

唯我一人能為救護云へり一切  
衆生は皆我子也しかるに十分か一た  
にも しかしなから鹿鳥を殺し

鯉鮒を取たればとて毛を吹て疵を  
求めて地獄へおつる事第一の遺恨  
なり五百の大願も衆生のため也

我一人なり共地獄に打入て罪  
業の輩一釜二釜なり共うはひ  
とりて浄土へむかわはやとそたくまるゝ  
況かゝる官兵にかられて本意をとけ

む事も共に悦ふ処なり中天竺  
摩迦陀国靈山浄土よりそ出立  
たまへる法花経の過去現在未來の  
四向四果の賢聖住行向地の菩

薩人天大会一人もれさりける  
本迹二門涌出の菩薩までも出  
立けり副將軍大聖文殊は師子  
王にたてまつりて清涼山に門出せさせ

たまへり家の子の一字文殊劍  
を抜心一にて打手をそろへたり  
大聖老人仏陀頗梨三蔵おもひ  
切てみえたりける優団大王は果さしと

かや普賢菩薩は白象王に奉りて  
二聖二天十羅刹を郎等に打供  
して法花経中の勢にははなれさり  
ける弥勒大聖補処の薩埵四十九  
重の摩尼殿都卒の内院より八万

四千騎の天衆を郎等に打供し  
てむかひたまへり惣しては三界所  
有の天王天衆一人ももれず御友  
にそ催さる釈提桓因二万天子善  
見城を立出て三光天子四大王  
持双の台よりたなひき出大師釈  
迦如来はもとよりの大将なり  
第六天の魔王をも打しるへたまひき  
人のしらぬ事か仏の矢さきには  
何物かかゝるへき鉄の堤十二をも射  
通したまひきあはれ大将や大白牛  
車と云車に乗り成所作智の楯をつ  
きてすてに地獄のきたそら迄よせかけ  
たり此外法華經の一之卷の妙字より  
第八の内題にいたる迄一々の文字ことに  
武者に現して六万九千三百八十四騎  
迄そかけ出て假使遍法界斷善諸  
衆生一聞法花経決定成菩提と時  
をつくりてそ馳まわれる南方をは宝  
生と云仏大将の宣うけてよせたまへり  
但此仏は常にも不及きこへたる武者にも  
あらずさしたる郎等眷属もなし此仏  
は徳人にて宝は持たまへり如意宝珠  
と申珠を平等性智のほこに入て弓  
矢なけれ共此玉を以て礮打にすとも  
獄卒にはよもまけしとそひとり事に  
はつふやきける無勢にてよせたまへと両の  
足よりしけく如意宝珠をふらし  
ければ此宝珠又無尽恒河沙の武者を

ふらしけり始にはおこかましくみへ後に  
は一番の大勢にそ成たりける其後四  
方より攻よせたり火出る程こそ戦ひける  
獄卒の牒状のことはこそ人しけなれ  
仏は正直の物かとおもへは貪欲第一の  
人なり衆生ほしかる欲のふかさ  
自業自得果の憲法の矢うけ取た  
まへとて一人の阿防羅刹浄頗梨の鏡  
を小楯にとりて十五東かなきわせめて  
放たれは西方の副將軍観音左衛門忍  
辱の甲の鉢いはしらかして十萬億  
の国を過て極楽の東門のはた板の  
かせきにそ射立たる新生の菩薩は  
舌をふりて人中へそ逃入ける六観音  
大将にて毘樓勒又毘樓博又等の  
二十八部衆各千手経のことくは一人  
して五百の眷属の大力の夜叉を  
打具して大定智慧の弓に弘誓深  
如海の鏑箭をさしくわけて仰にいほく  
なむたち目にも見音にも聞らん大悲  
代受苦の大聖尊衆生界を救ひつく  
さすは正覺をとらしとおもひきりたる  
副將軍なり手なみの程はたしかに  
見ならんとて矢の長さは五十由善那  
こひちまわる程に引わたして放  
したれは八大地獄を一々に射通して  
無間地獄のかななんのかせきにつらぬ  
きて地獄をそ空へ持あけたる城の上  
を西方へおもたけに飛上たり罪業の

重さに又もとのことく落にけり是を  
見て阿防羅刹も矢前にかゝらしと  
そあわてさはきける東の手には月光  
菩薩小將軍にて十二神將鼻  
をならへて打手をそろへて三の木戸口  
をは打破りて三途川のはた迄攻よせ  
たり北にはおよそよすへき方もなし  
多由旬の剣のことくにそ流しける  
普賢菩薩文殊法花経を身にま  
きておもひきりてそかゝりける平等  
一味の雨くたりて熱鉄の湯もさめにけり  
大に身を現して百由旬のつるきの岸  
を手に入て吹ければ塵灰に砕て青  
蓮花の種とそ成にけるしかれ共獄  
卒阿防等心を倒さすはつみ出てそ  
戦ける南の手は如意宝珠をつふて  
にしてうちければ羅刹か甲の鉢はくた  
けよとそ投たりける七日七夜合戦  
するにたかひに勝負なかりけりいよく  
地獄の方には勢つきてければ落へき  
事更になしとそ今に聞へ伝ふ

1 京「ト」入る 2 十「り」  
3 十「浄土へは参らせず」入る 京（四字分空  
白） 4 十「落す」 5 十「むかえはや」  
6 十「事もとも」 7 十「万」  
8 十「は」なし 9 十「の」なし  
10 京「出ル」 11 十「な」 12 京「妙ノ字」  
13 十「卷」入る 14 十「ま」入る

15十「常にも聞およはず」 16京「箱」  
17十「雨」 18十「其後」なし  
19十「にそ」 20京「ヒトシキナレ」  
21十「に」 22十「たる」 23十「見ならへ」  
24十「かななへ」 25十「日光菩薩」 入る  
26十「一二」 27十「みね高くさかし鉄の湯を  
わかして滝水の」 入る 28十「峯」  
29十「とそ今に聞へ伝ふ」なし

和歌

三千のまたら女を

引つれて

人は浄土に

まいるそと

しれ

法華經の妙の一字の

力にて人も仏も

浄土にそすむ

1十 なし 2十 なし

第四段

※下巻第一段の【大日心王…帰命】は本来この位置

本覚心法身也此仏にはいかにしてか  
なるへき信心をいたして五字の真言  
陀羅尼をかゝせてまほりにかけよ  
今生には諸仏菩薩曼荼  
羅擁護をくはへて弓矢の恐なく重  
病をうけす所知所領心になかひ

1 求むる処望む処円満して男

女諸共に衆人愛敬身にあまり

成仏する事よにやすしおそろ

しき地獄をも極楽になすそかし

法身をかへすして仏にならんこと

やすかるへし智者此ことほりを悟

れはよろつの事つみならず

無智の人は学生に問ふへし世

間の浅名をも以て法のふかき処

をあらはす此合戦状は仏智

に叶へりさらにそしる事

なかれ

1十「所求所望」 2京「ヲソロシシ」

3十「世中には智者に過たるたからはなし」 入

る 4十「以」なし 5十「性」 入る

6京「状」なし

奥書

願以此功德 普及於一切 我等与衆生

皆共成仏道

法泉禪窟 「木管」



### 三 解題

#### 三一 早大本の概要

本稿で取り上げる早大本「仏鬼軍絵巻」は、『弘文荘敬愛書図録』（二九八二年）に掲載されていた作品である。<sup>(4)</sup> 同年に早稲田大学図書館が弘文荘から購入し、現在に至る。なお早大本「仏鬼軍絵巻」の全画像については、早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開がされている。

先にも述べたとおり、本作の下巻第一段詞書冒頭部には、第一紙から三紙を跨ぐかたちで、下巻第四段詞書の前半部分に相当する本文が挿し込まれている。挿入箇所文末には丸印が付されており、一文字空けて次の文を書き継いでいることから、底本での錯簡をそのまま書き写したことがうかがわれる。また下巻第一紙・四紙・三八紙の上部には、旧所蔵者によるものとみられる錯簡部の本来の本文位置を指摘する付箋がある。

上巻巻頭部の墨書「此二幅十念寺之什物、而一休作之、土佐光信画之」は、「仏鬼軍絵巻」の伝承についての記述である。この二巻の絵巻は十念寺の什物で、物語は一休宗純によるものであり、絵は土佐光信が手がけたと記されるが、本作の画風は、近世奈良絵本の特徴を備えており、光信作であったとは考えにくい。<sup>(5)</sup> また十念寺と一休の関係についても、同様の記述が他の伝本に多く確認できることから、これらの内容は、近世に加えられた伝承が反映されたものと考えられる。この点については後ほど検討する。

奥書の記述からは、この絵巻が「法泉禅窟什物」であったことが判明する。一休作の伝承から禅宗寺院に所蔵されていたものと推測できるが、「法泉禅窟」がいずれの寺院を指しているのかは、現時点では特定できていない。また紙継部分に捺された「籍田長興」の詳細についても不明である。

早大本は白描模本であるが、随所に「うんけん（纏綱）」「金」「朱」といった色指定の注記があり、原本での彩色がうかがわれる。ここから想定される彩色の特徴や、龍頭鷲首の舟、獣面の楯といったモチーフは、奈良絵本諸作例（チェスター・ビーター・ライブラリー蔵「舞の本絵巻」、國學院大學図書館蔵「咸陽宮絵巻」、海の見える杜美術館蔵「舞の本」等）にも共通して見られる。したがっ

て早大本原本は、これらと同様に寛文・延宝期（一六六一～八二）の極彩色奈良絵本の一例であった可能性が高いと考えられる。

#### 三二 現存諸本について

続いて『仏鬼軍』現存諸本とその内容を再整理する。中畷容子氏<sup>(6)</sup>、本井牧子氏により、既に諸本の整理がなされているが、本稿ではこれらの研究に基づき、新たに早大本を加えた諸本一覧を示す。<sup>(7)</sup>

##### 〔諸本一覧〕

<p>十念寺本系統 写本 (絵巻)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・十念寺蔵、一卷、重文</li> <li>・神宮文庫蔵、模本、一卷、享保十四年（一七二九）写</li> <li>・神宮文庫模本</li> <li>・東京国立博物館蔵、模本、一卷、天保十一年（一八四〇）写</li> <li>・東博模本</li> <li>・京大文学部美学美術史研究室蔵、模本、一卷</li> <li>・京大美学模本</li> <li>・(冊子)</li> <li>・宮内庁書陵部蔵、『片玉集』巻五〇所収、享和元年（一八〇二）写</li> <li>・(書陵部本)</li> </ul>	<p>刊本</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元禄十年（一六九七）刊</li> <li>・文政六年（一八二三）刊</li> <li>・天保五年（一八三四）刊</li> <li>・刊年不明版本</li> </ul> <p>〈元禄版〉 〈文政版〉 〈天保版〉</p>
<p>早大本系統</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・早稲田大学図書館蔵、白描模本、二巻</li> <li>・(早大本)</li> <li>・京大文学部研究科図書館蔵、一冊、享保十四年（一七二九）写</li> <li>・(京大文研本)</li> </ul>	

#### (一) 十念寺本系統の諸本

〔諸本一覧〕に挙げたうち、最も古い伝本が十念寺本である。一卷・紙本

淡彩の絵巻であり、冒頭部分が欠落している。奥書は備えておらず、絵師及び詞書筆者はともに不明である。現状では全四段構成であるが、欠落により、第一段に詞書はなく、絵から場面が始まる構成となっている。

美術史学における十念寺本の研究は、一八九九年の『國華』に「佛鬼軍絵詞」として紹介されたことから始まった<sup>8)</sup>。その後の白畑よし氏の研究、真保亨氏の作品解説では、本文内容と画風から、制作年代は室町時代中〜後期であるとの見方が示されている<sup>9)</sup>。

「諸本一覽」に示した伝本のほとんどは十念寺本をもとにしており、このことから同本の影響力の強さがうかがわれる。早大本と京大文研本を除くすべての写本・版本は、十念寺本の本文を忠実に書写しており、本文に異同はみられない。以下では、十念寺本を祖本とする伝本の概要を確認する。

東博模本は、木挽町狩野家・九代目当主である晴川院養信（一七九六〜一八四六）が主導した寺社宝物の模写事業により制作された。現在、東京国立博物館が関連模本類を所蔵しており、当本はこのうちの一つである。奥書には「右仏鬼軍絵詞一卷書画共二一休和尚真蹟也／十念寺什物於京都令模写了／天保十一庚子年仲夏 養信「花押」」とあり、天保十一年に十念寺本を原本として模写されたことが確認できる。さらに本紙下部の銘記からは、井上昆得、岩崎信盈、狩野養長、中山養福という四人の門人らによって書写されたものであることがわかる。

神宮文庫模本及び京大美学模本については、原本の画像データを確認できていないため、中嶋氏、本井氏の研究での整理に基づいて概要を述べる。

神宮文庫模本は紙本淡彩絵巻で、奥書には「此巻物者紫野一休和尚自画讀本紙十念寺有り、享保十四年西四月中旬写之」と記される。その図様や構成は、十念寺本そのものではなく、元禄版を写したものであるという。

京大美学模本は十念寺本の忠実な模本である。奥書を持たないため書写年代は不明であるが、諸本の中では最も時代が降る伝本であるとされている<sup>10)</sup>。

書陵部本は、江戸時代後期の国学者・津村涼庵による叢書『片玉集』巻五〇に「仏鬼軍一卷」として収められている。その奥書には「右京今出川十念寺宝物、寛政十二庚申秋八月四日拜「閱之」艸写し置」、「右谷中幡随院乗運自

省主書写之本、浅草行安寺圓阿上人借得之、朽鈍借伝之書写了 享和改元仲夏 涼庵」と記される。これによって、乗雲という人物が十念寺本の本文を書写した本が存在し、さらにその内容を涼庵が書き写したものが書陵部本であるということが確認できる。

版本の初発本である元禄版は、十念寺一八世の澤了が、十念寺蔵の「仏鬼軍絵巻」を見つけ、その内容を後世の宝とするために刊行したものである。識語に「正本をもつて一字一画のたがひなく」と記されるように、十念寺本文を忠実に書写している。

文政版は元禄版の復刻版であり、本文及び挿絵は同様である。元禄版・文政版の挿絵を見ると、十念寺本に描かれる構図やモチーフを踏襲しながら、画面を整理していることがわかる。大日如来や宝生如来など、いくつか十念寺本にはないモチーフが描かれるが、これらはいずれも本文内容に沿ったものであり、版本制作にあたって補足的に追加されたものであると推測される。

天保版も元禄版の再刊本であるが、挿絵は菱川清春によるものに差し替えられている。元禄版本と画風は大きく異なるものの、その画面は十念寺本・元禄版のモチーフや画面構成を再構成したものである。

以上に見てきた諸本には、奥書を持たない京大美学模本を除いて一様に、十念寺の『仏鬼軍』は一休の手によるものである旨が記されている。さらに、江戸時代後期に刊行された地誌『拾遺都名所図会』の十念寺の項目にも「仏鬼軍図、一休和尚の筆なり、仏地獄を破つて無比の楽城とし給ふ図なり、当寺什宝とす」とみえる。これらことから、十念寺には一休制作による『仏鬼軍』が伝来しているという伝承が、近世以降に流布していた様子うかがわれる。本井氏が指摘するように、十念寺本がこれほどまでに忠実に書写・刊行され続けたのは、やはりこの伝説が背景にあったためと考えられよう<sup>11)</sup>。早大本の巻頭墨書の「此二幅十念寺之什物而一休作之」という部分も同様に、これらの影響を反映したものであるとみなされる。

## (二) 京大文研本

京大文研本は、十念寺系統の諸本に欠ける本文を備えた伝本である。同本

は、二〇〇〇年に実施された京都大学蔵お伽草子作品の悉皆調査により、文学部印度哲学研究室から発見された。この調査に基づき、本井牧子氏は同年の論考において『仏鬼軍』諸本の整理とともに、新出本として京大文研本の紹介をしている<sup>12)</sup>。これら一連の研究により、それまで不明とされていた『仏鬼軍』の物語前半部分が明らかになった。

京大文研本は写本一冊で、外題は「仏鬼軍邪正記」、奥書には「右、巻物二軸ニ賛ト画ト雑ヘ書ス。十念寺之什物ニシテ而一休作リ之賛、土佐光信作リ之画ニ也。其、写軸在リ法泉ニ、享保十四己酉歳三月、借テ而写之賛ニ也」と記される。本文は、漢字片仮名交じり。絵は備えていないが、絵巻の絵にあたる部分には注記を挟んでいる。注記では、「此間二薬師如来并十二神将等ノ出陣ノ画アリ」というように、底本の絵の詳細が簡潔に示される。

本井氏は、『弘文荘敬愛書図録』に掲載されていた二巻本「仏鬼軍絵巻」（早大本と同二）についても言及している。論考の中で、京大文研本奥書の「十念寺之什物ニシテ而一休作リ之賛、土佐光信作リ之画ニ也」という記述が、弘文荘本の巻頭に「此二幅十念寺之什物而一休作之土佐光信画之」とあることと同内容であり、また「其、写軸在リ法泉ニ」と記されていることが、弘文荘本の奥書に「法泉禪窟什物」とあることに一致すると指摘している。これに加えて、両者が共通して十念寺本に欠ける本文を有している点と、目録に掲載された絵の内容が京大文研本の注記と合致する点から、この弘文荘本を京大文研本の祖本として想定している。これらの点については、次項にて詳細に検討する。

### 三―三 早大本の位置付けと書写系統

以下では、早大本、十念寺本、京大文研本の本文内容と構成を比較し、各々の異同について明らかにする<sup>13)</sup>。また本文の字句異同から、早大本の位置付けと現存諸本の書写系統について検討する。なお、三伝本の各段内容とその対応関係は稿末の「表」に示している。

#### (一) 十念寺本との比較

まずは早大本と十念寺本の内容と構成を比較する。両本を比較した際に、注目すべきは以下の四点である。

一点目は、早大本の上巻第一段詞と絵、第二段詞にあたる部分が十念寺本には欠落していることである。

二点目は、和歌の挿入。早大本下巻第三段絵と第四段詞の間には、十念寺本には存在しない「三千のまたら女を引つれて人は浄土にまいるそとしれ」「法華経の妙の一字の力にて人も仏も浄土にそすむ」という二首の和歌が挿入されている。

三点目は錯簡の有無。早大本は底本での錯簡を受け継いでいると思われる、下巻第四段詞の前半部分が、下巻第一段詞冒頭部に挿し込まれているが、この錯簡は十念寺本には見られない。

四点目は、早大本下巻第三・四段部分の構成である。十念寺本の第四段詞は、早大本では下巻第三段・四段詞に分割されている。十念寺本の第四段詞は他の段と比べて文量が倍以上あり、やや不自然ではあるものの、絵との対応関係を考えるならば、この構成は本来的なものであるとするのが妥当である。十念寺本の本文が二分割されたうちの後半にあたる早大本の下巻第四段詞は、前述の錯簡箇所とも重なっており、これらには何らかの関連があるとも考えられる。

次いで本文異同であるが、両本のあいだには全四十八箇所<sup>14)</sup>の異同がみられる。以下にその一例を挙げる。

西方極楽には宗徒の人々二十五騎、是は薬師に同座して酒器<sup>下へたてせ</sup>へたてて、  
評定する程の仏七俱胝座したまへる。  
(下巻第二段)

十二神将、鼻をならへて、打手をそろへて、三の木戸口<sup>ナヒ</sup>をは打破りて、  
三途川のはた迄攻よせたり。  
(下巻第三段)

このように早大本の本文は、誤写によって本来の意味が通らないかたちになっているのが明らかである。この特徴は他の異同箇所にも共通している。また早大本には、一文字単位の誤写だけではなく、脱語及び脱文もみられる(括弧内は早大本にない箇所)。

一切衆生は皆我子也、しかるに十分か一たにも【浄土へは参らせず】。

東の手には【日光菩薩】月光菩薩、小將軍にて、

多百由旬の劍の【みね高くさかし、鉄の湯をわかつて滝水の】ことくにそ流しける。

(下巻第三段)

智者此ことほりを悟れば、よろつの事つみならず、無智の人は学生に問ふへし、【世中には智者に過たるたからはなし】。

(下巻第四段)

一方で早大本独自の挿入は一箇所のみである(傍線部は早大本での挿入箇所)。

いよ／＼地獄の方には勢つきてければ、落へき事更になしとそ今に聞へ伝ふ。

(下巻第三段)

以上の本文異同の特徴から、十念寺本の本文は早大本より原型に近いものであることが確認できる。

## (二) 京大文研本との比較

京大文研本は、早大本と同様の本文構成をとっている。京大文研本での絵

の注記箇所と早大本の画面内容、また先に述べた和歌の挿入、詞書の錯簡までもが完全に一致する。さらに京大文研本と早大本の本文は、十念寺本と比較した際の誤写及び脱文も共通しており、両本が非常に近い関係にあることがわかる。

ただし京大文研本には、十念寺本と早大本の間には存在しなかった異同が二十三箇所確認できる。これらは、京大文研本の本文を書写する過程で発生した誤字であろうと考えられる。

カクノ如クノ二十五菩薩一人シテ、九億万恒河沙ノ郎等ヲ打借シテ、乗物ハ好ミ好ミナリ。

(京大文研本第三段)

ヲソロシシ地獄ヲモ極楽ニナスゾカシ、法身ヲカヘズシテ仏ニ成ン事ヤスカルベシ。

(京大文研本第六段)

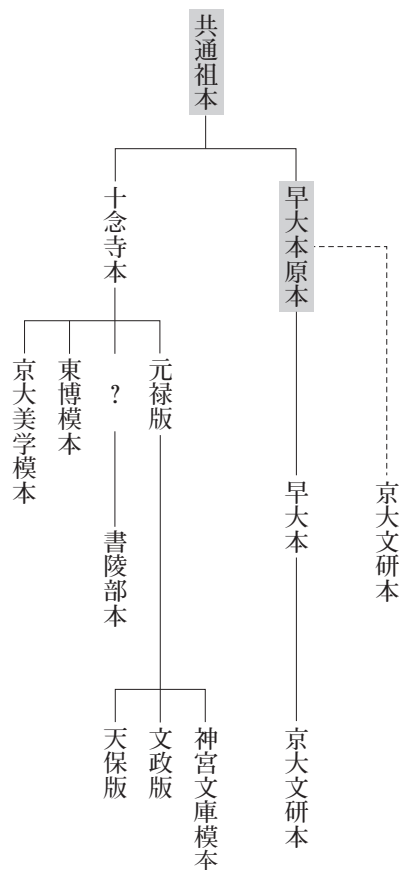
このような点から、京大文研本を底本として早大本が成立した可能性は否定される。つまり京大文研本は早大本を底本とする親子関係、あるいは共通祖本に基づく兄弟関係である可能性が考えられる。

## (三) 早大本の位置付け

以上の比較を踏まえて、十念寺本、早大本、京大文研本の書写系統を整理した。なお十念寺本系統の諸本については、すでに中畠氏によって整理がされているため、本稿では同氏の説を踏襲した。

従来知られていた十念寺本系統に加え、近年、京大文研本及び早大本が確認されたことよって、現存する『仏鬼軍』諸本が共通の祖本をもとにする二つの系統に分けられることが明らかになった。この祖本は上下巻分を備えた完本であったものと推定でき、現存諸本のうち、十念寺本系統は上巻部が欠失したものの、早大本系統は完本ではあるものの、下巻部に和歌の挿入と錯

簡があるものと特徴づけられる。これまでの研究で主として取り上げられてきた『仏鬼軍』は、いずれも十念寺本系統に位置付けられるものであったが、早大本と京大文研本は、十念寺本とは別系統の作品と見なされるのである。



※現存しない伝本については灰色で示した。破線は仮定を表す。

## おわりに

本稿では、現存諸本との本文対照を通じて、早大本が現在では忘れ去られていた『仏鬼軍』の一系統を復元し得る貴重な伝本であることを明らかにした。

「仏鬼軍絵巻」の主題である極楽と地獄との争いの物語や、仏菩薩を擬人化する表現は、後世の文学及び絵画作品にも影響を与えている。例えば、明暦四年（一六五八）刊行の『焰魔王物語』（慶応義塾大学図書館蔵）には、十念寺本に欠ける上巻部分の本文が一部引用されている。その引用文は、誤写が極めて少ない状態であり、早大本本文よりも原型をとどめていることが注目される。このことから、江戸時代初頭に、十念寺本と早大本を遡る完本と呼べる本文が存在していた可能性がうかがわれる。今後はこれらの関係性にも目を向け、室町時代における「仏鬼軍絵巻」の成立と近世における展開について、より一層の検討を進めていきたい。

## 註

- (1) 「仏鬼軍絵巻」の主題と早大本の絵画様式に関しては、『美術史研究』(第六〇冊、二〇二二年十二月発行予定)にて別に論じる予定である。
- (2) 「仏鬼軍」後半部分の本文は、『禅林法話集』(有朋堂、一九一四年)、『国文東方仏教叢書』(第一輯第九卷、文芸部上、国文東方仏教叢書刊行会、一九二六年)、『室町時代物語大成』(第十一、角川書店、一九八三年)などに活字化されている。また『一休仮名法語集』(一休和尚全集)第四卷、春秋社、二〇〇〇年)には、飯塚大展氏による訳注が掲載されている。「仏鬼軍」の文章表現上の特徴や類似作例との関係については、市古貞次「中世小説の研究」(東京大学出版会、一九五五年)、藤井隆(解説)「仏鬼軍」(『日本古典文学大辞典』第五卷、岩波書店、一九八四年)、三浦億人(解説)「仏鬼軍」(『徳田和夫編「お伽草子事典」東京堂出版、二〇〇二年)、本井牧子「十王経と十王信仰—経典から文学へ—」(『軍記物語の窓』二、二〇〇二年)、伊藤慎吾「擬人化と異類合戦の文芸史」(三弥井書店、二〇一七年)参照。
- (3) 本井牧子「室町時代物語「仏鬼軍」について—新出本の紹介を兼ねて—」(『京都大学国文学論叢』五、二〇〇〇年)。
- (4) 反町茂雄編『弘文荘敬愛書目録』(弘文荘、一九八二年)では、本作の構成を「下巻は四段四回」と紹介しているが、これは誤りであり、正しくは四段三回である。
- (5) 『雍州府志』(一六八四年)には、「十念寺、在本満寺北、而浄土宗也、縁起一卷、又仏鬼軍図、土佐家之筆也」とあり、十念寺本「仏鬼軍絵巻」を土佐派絵師の手によるものとする伝承が流布していた可能性も考えられる。
- (6) 中寛谷子「『仏鬼軍』について」(『大谷学報』七六一、一九九七年)。
- (7) 『国書総目録』には、本稿で挙げた諸本のほかにも、森川如春庵鬼集の「伝仏鬼軍絵巻断簡」が伝本の一つとされている。この断簡には、金棒を掲げる鬼と弓矢を引く鬼が描かれているが、これと一致する図像は現存諸本のうちには見出せない。そのため、「仏鬼軍絵巻」の断簡である蓋然性は低いと考え、本稿の「諸本一覽」からは除外した。また「男爵松尾家所蔵品入札」(東京美術倶楽部、一九二九年三月十一日)の売立目録には、狩野探幽筆「佛鬼合戦巻物」二巻が掲載されている(東京文化財研究所「売立目録データベース」を参照)。目録上の図版からは、十念寺本の図像を踏襲する画面内容であることが確認できる。掲載情報のとおり、狩野探幽(一六〇二〜一七四)筆であるならば、その制作は元禄版本(一六九七年)を遡ると仮定でき、早大本原本とおおよそ同時期の貴重な伝本であると推測される。しかしながら、落札者及び現在の所有者については不明である。
- (8) 「佛鬼軍絵詞」(『國華』一一九、一八九九年)。
- (9) 白畑よし「仏鬼軍絵巻に就いて」(『大和文化研究』九四、一九六四年)、真保亨(解説)「仏鬼軍絵」(『角川絵巻物総覧』角川書店、一九九五年)。十念寺本の影印は、奥平英雄編『御伽草子絵巻』(角川書店、一九八二年)を参照。同書には、白畑よし氏による解題、松本隆信氏による詞書翻刻も掲載されている。

- (10) 京都大学付属図書館編・発行『お伽草子―物語の玉手箱―』（一九九九年）の目録では、明治期以降の制作と推定されている。
- (11) 本井氏は、書陵部本奥書の記述と、十念寺蔵「一休像」（二幅、紙本淡彩）との検討を通じて、この「一休像」が『仏鬼軍』一休制作説に信憑性をもたせるために、後世に作爲的に制作されたことを明らかにしている。また飯塚氏は、前掲註(2)著書において、一休制作説の伝承を、「一休咄」刊行以後、より一層高まった一休の人気に便乗したもの」としている。
- (12) 前掲註(3)論文に加え、翌年刊行の京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むろまちものがたり』（第二巻、臨川書店、二〇〇一年）には、京大文研本の影印と、本井氏による翻刻と解題が掲載されている。なお同氏の論考では、京大印哲本との名称で紹介されているが、現在、本作は京都大学文学研究科図書館に所蔵されているため、本稿では京大文研本として名称を統一した。
- (13) 諸本の本文引用に際しては、私に句読点を補った。

〔表〕

第三段絵	第三段詞	第二段絵	第二段詞	第一段絵					
絵	東方から寄せる薬師如来の軍勢(日光・月光菩薩、十二神将ら)	絵	西方から寄せる阿弥陀如来の軍勢(二十五菩薩、地藏菩薩)	絵	欠	欠	欠	欠	十念寺本
下第二段絵	下第二段詞	下第一段絵	下第一段詞	上第二段絵	上第二段詞	上第一段絵	上第一段詞		
絵	異同なし	絵	西方から寄せる阿弥陀如来の軍勢(二十五菩薩、地藏菩薩)	絵	炎魔王の論言と阿防羅刹の進言 地獄側の戦の準備 三途の川から地獄に至るまでの様相	絵	大日如来の勅定	阿弥陀如来と文殊菩薩による地獄の平定に関する評定	早大本
第四段		第三段		第二段		第一段			
「此間二葉師如来并十二神将等、出陣ノ画アリ」	異同なし	「此ノ間二仏菩薩出陣ノ所ノ画アリ」	西方から寄せる阿弥陀如来の軍勢(二十五菩薩、地藏菩薩)	第六段前半部が混入(錯簡)	「此間二炎魔王并地獄ノ画アリ」	異同なし	「此間二阿弥陀并諸菩薩等ノ画アリ」	異同なし	京大文研本

		第四段絵	第四段詞	
第四段後半部に		絵	北方から寄せる釈迦如来の軍勢(普賢・文殊菩薩ら) 南方から寄せる宝生如来の軍勢 西方から寄せる仏菩薩の軍勢と獄卒らの攻防 大日如来の指示による加勢 浄土と化す地獄 結び前半 結び後半 回向文	十念寺本
下第四段詞	(和歌)	下第三段絵	下第三段詞	
奥書 結び後半 回向文	※ 大日如来の指示による加勢 浄土と化す地獄 結び前半	絵	北方から寄せる釈迦如来の軍勢(普賢・文殊菩薩ら) 南方から寄せる宝生如来の軍勢 西方から寄せる仏菩薩の軍勢と獄卒らの攻防 大日如来の指示による加勢 浄土と化す地獄 結び前半 結び後半 回向文	早大本
第六段	(和歌)		第五段	
奥書 結び後半 回向文	※ 大日如来の指示による加勢 浄土と化す地獄 結び前半	「三千ノマタラ女ヲ引キ連レテ人ハ浄土ニマイルゾト知レ」 「法華経ノ妙ノ一字ノ力ニテ人モ仏モ浄土ニソ棲ム」	「此間二釈迦ヲ大将トシテ諸菩薩ト地獄ト合戦ノ画アリ」 「三千ノマタラ女ヲ引キ連レテ人ハ浄土ニマイルゾト知レ」 「法華経ノ妙ノ一字ノ力ニテ人モ仏モ浄土ニソ棲ム」	京大文研本

*Bukki-gun emaki* owned by Waseda University Library:  
Reprint and bibliographical notes

Maho OSAWA

Abstract

*Bukki-gun emaki* (Tale of the Buddhas' Great War on Hell), owned by Waseda University Library (*Sōdai-bon*), is a copied handscroll of the Edo period (ink on paper, two volumes). It depicts the story of the battle of the Bodhisattvas against the Demons in hell, called *Otogi Zōshi* established in the Muromachi period. Owned by Jyunenji Temple (*Jyunenji-bon*), the handscroll was widely known as an example of the same subject, and printed books based on this were circulated in the Edo period. *Sōdai-bon* has the first half of the story, which is missing from the existing books based on *Jyunenji-bon*. In addition, its composition and style of painting are very different from the aforementioned. Here, the entire text of *Sōdai-bon* is printed for the purpose of making it available to the public as a resource. Furthermore, the position of this work is confirmed through a comparison of the text with other extant books.